

## 『一人の笑顔のために』

## ✿夢や希望を実現するために✿

以前参加した人権教育講演会の講演の中で、とても印象に残った話があります。

国の奨学金が給付（返還の必要がないもの）から貸与（返済義務があるもの）に変わろうとしたとき、給付型奨学金の存続のお願いに全国の部落差別と闘っている高校生が当時の文部省（現・文部科学省）を訪れた時の話です。その時の一人の女子高校生の訴えが心に残っています。

「文部省のおじさん。私、保母さん（保育士）になりたい。私が小さい時、お友だちと遊んでいたら、そのお母さんが、『こっちへおいで、その子と遊んだらだめ、間違えられたらどうするの。』と、お友だちを私のそばから連れ去りました。どこの保育園でも先生たちが最初に言うのは、『みんな仲良く』ではないのですか？ だから私は保母さん（保育士）になって差別をしない子どもたちを育てたい。私は今、母と暮らしています。母は毎日シンナーで革をなめす仕事をしています。そのシンナーの影響もあって母の身体はぼろぼろです。痛む母の身体をさすりながら、私が保母（保育士）になるために大学に行けば、これからも母は身体をけずって頑張らなくてはならない。それを思うととてもつらい。でも保母（保育士）さんになりたい。だから奨学金が必要なのです。」



あとわずかで義務教育修了（卒業）を迎え、新しい世界に旅立とうとしている3年生。

1・2年後には高校に進学する1・2年生。みなさんはどのような思いで高校へ進学しますか？

☆☆

## 私の進路公開

「進路公開」とは、互いの進路（生き立ちや暮らしを含めた自分の生き方）を公開することによって、それぞれの思いを共有し、反差別の（支え合い、繋がり合う）仲間づくりを行うための取組です。

私が生まれた家はとても古く、わらぶきの屋根にトタンをかぶせたトタン屋根の家でした。小さい頃の家には土間があり、その奥にあったかまどで薪を燃やしご飯を炊いていたのを覚えています。風呂は当然、五右衛門風呂でした。私の父は9人兄弟姉妹で、男兄弟の中では一番下でした。上の兄たちは就職で家を出て行き、末の父が残ることになります。父は中学校卒業後すぐに就職をします。父が退職をするころには部下を従える役職についていましたが、最初は中学校しか出ていないことでとても苦労をしたみたいです。また、部下をもつようになってその部下が自分より学歴が高いということで、そのことでも大変な苦労があったようです。そんなことから私を絶対大学まで出してやろうという思いになったようです。私が中学生の頃はそんな父の思いには気づいていませんでした。どちらかというと、仕事が終わると毎日焼酎を飲み、酔っ払って何回も同じことを話す父が嫌でした。そんな父を見て、絶対こんな酒飲みにはなりたくないと思ったものです。





これはうれしいことですが、私が小学校5年生のときに家を新築しました。しかし、その支払いもあり、お金のことで父と母がよくけんかをしていたのを覚えています。それがとてもいやでした。そのこともあり経済的にそんなに裕福ではないことは私にも理解でき、高校受験のときも絶対公立高校に合格しなければと思っていました。なんとか公立高校には合格し、その後教師になりたいという思いから大学に進学します。大学に合格してアパート暮らしを始めるわけですが、とてもうれしかったことを覚えています。大学に合格したこともそうですが、家を離れて一人暮らしができるということもうれしい要因のひとつでした。

私が大学に通う間、学費はもちろんのこと、アパート代を含め生活費を毎月仕送りしてくれていました。当然感謝はしていましたが、それは当たり前のことだというぐらいにしか思っていなかった自分があります。今考えればそのために父は自分のくらしを相当犠牲にしていたはずなのですが、そこまで私の思いは及びませんでした。

無事大学を卒業し、教師生活がスタートします。父は私がはやく実家（和水町）に帰ってくることを望んでいたようですが、初任地が熊本市、次が菊池市ということもあって、結婚して住んでいた県営の武蔵ヶ丘団地（光の森のすぐそばです。）で生活を続け、結局父が亡くなるまで武蔵ヶ丘で生活をしていました。

父が食道がんに侵されていることが分かりました。発見が遅れ、放射線治療をはじめましたが食道に穴が開いていることがわかり、その治療もできなくなり、食事も水も口からとることができなくなりました。そして亡くなってしまったわけですが、父の葬儀の準備をしているときに、はじめて父の思いを知らされることとなります。

父の友人が私に言いました。「お前の親父が酒に酔うといつも言っていたことを知っているか・・・。」と話し始められました。

まだ、古い家に住んでいた頃です。私が父から、「なぜ友達をあまり家に連れてこないんだ」と聞かれたとき、私は覚えていないのですが「こんなぼろ家に連れてこられるか。」と答えたのだそうです。「お前の親父は酒に酔うといつも、あのとき『こんなぼろ家に連れてこられるか』と雄治が言うたもんなあ、と話しよらしたっぞ。」と聞かされました。私は、あふれる涙を止めることができませんでした。

父は、私のそんな一言で家を建てることを決心し、その上私に同じような苦勞をさせたくないという思いで大学まで出してくれたのだということがはじめて分かりました。そんな父の思いに、父が亡くなった後にやっと気づけたのです。私が今こうして生活できているのは間違いなく父のおかげなのです。父が元気なときに、「ありがとう。」の一言が言えなかったことが、今でもくやしくて仕方ありません。

当時私は、自分の力で自分の行きたい高校や大学に合格したとしか思っていませんでした。しかし、それは家族の大きな支えがあったからこそできたのだということにやっと気がついたのです。

私の父は中卒ですが、私は今、父の生き方を誇りに思い、尊敬しています。